

海は友だち

吉澤 道子

那覇泊港からフェリーで二時間、身体中の細胞がすっかり潮の香に満たされ生き返ったようになる頃、目指す座間味島に到着する。

半年振りの大好きな海との再会である。

まずボートで近くの無人島に渡る。三点セット（マスク、シュノーケル、フィン）を

着けるのもどかしく泳ぎ出す。水のやさしさがさっと全身を包む。自分のたてる小さな波が皮膚をなで、ピチャピチャという空気と水の戯れる音が鼓膜に響いてくる。海水の浮力を楽しみながら二十メートル程泳ぐと、もう見覚えのある根（サンゴが塊になっている

所)に着く。ただ泳いでいるだけでも楽しいのだが、その中に入って行かずにはいられない。呼吸を整え潜ってみる。ちょうどペーミントゼリーの中にスリりと頭から滑り込んで行く感じだ。水深三メートル、身体の重さが消えフィンが確実に水をとらえゆっくりと潜水して行く。底に着いても初めは五秒と息が続かない。そのうち身体が海水同化術を想い出すと、三十秒位は楽しめるようになる。カラフルな魚たちは上から眺めているだけでもきれいだ、一緒に泳ぐと本当の美しさがわかる。さらに良いのは下から海面をバックに見上げる方法だ。上方から差し込む陽光に煌いてガラス細工のように繊細で美しい。これだけはダイビングをする者にだけ許されるぜいたくである。

浅瀬の根についている小魚にはスズメダイ

の類が多い。コバルトスズメとソライロスズメ(デバスズメ)がチラチラと泳ぐ様はまるで動く宝石だ。白に黒いストライプがおしゃれなミスジリュウキュウスズメもいる。イソギンチャクと共生するクマノミ、このペアがじゃれ合う様子はいつまでも見ていても飽きない。ゴカイの仲間のイバラカンザシは円錐形にかんざし状の触手を出しているのだが、手で水を送るとあわてて引っ込める。この動作がかわいくてついからかってしまう。中には主のようなおじさん顔のウツボが棲みついている。そしてヒラヒラ舞い泳ぐチョウチョウオオヤッコの仲間、いつ行っても会えるおなじみさん達である。ここで二十分も遊んでいると身体がすっかり海に慣れてくる。

いよいよポンペを背負って潜るスキューバダイビングとなる。さすがに一本めは緊張す

る。不思議なもので、少しでも不安を感じる
と身体が沈んで行かない。水に対する潜在的
恐怖が自然と頭を浮かせてしまいうらしい。思



いきって肺の中の空気をフウツと吐き出すと
ちよつと沈み始める。一旦全身が水面下に入
ってしまふと、魔法にかかったように楽に
潜り出せる。『ああこの感じ、これこれ。』
思わず歓声をあげる。その声は音にならずボ
コボコと大きな泡になって上がって行く。顔
に当たる泡のくすぐったさも嬉しい。水の中
では全てがゆったりとしていて、それが大き
なやすらぎを感じさせる。

シュノーケリングと違い、スキューバでは
長く水中に滞在できる。深度で異なるが、三
十メートルまでなら三、四十分は潜ってい
られる。ルールを守って余裕のあるダイビング
をすれば、誰でもしばし人魚の生活を楽しめ
る。熱帯の魚たちはどうして皆こんなきれ
いな色をしているのだろう。海の青に染まった
サンゴやソフトコーラルも水中ライトで照ら

すと極彩色をしているのがわかる。一糸乱れず塊になって泳ぐ小魚や幼魚も大群になると迫力がある。回遊魚のバラクーダやイソマグロの悠然と泳ぐ姿は風格さえ感じる。マンタや海亀、ナポレオンフィッシュなどは見られただけで嬉しくなってしまう。一方海の中の景観も陸上に劣らず変化に富んでいる。白い砂以外何もない砂漠もあれば断崖絶壁もある。無数のサンゴや連なって作る草原もあれば、トサカというソフトコーラルが一面を埋めたお花畑まである。鮮やかな赤や黄色をしているが、中でも紫のものが幻想的で美しい。ここを浮遊していると妖精になった気分だ。心地良さのあまりつい自分の力を過信してしまふことがある。『これ位大丈夫だろう』という甘い判断がとりかえしのつかないことになることもある。海の中の大胆な行

動は決して自慢にならない。むしろ一小動物としての謙虚さこそ似つかわしい。

ダイビングの楽しみ方は人それぞれである。景色や魚を観ているだけの人、写真を撮る人、探検の好きな人など、海の中は興味の尽きないフリーゾーンである。だが一番の魅力は重力からの解放と水との一体感だろう。完全にリラックスしている時は心も身体も透明になり海の青に同化してしまう。地球のゆりかごに抱かれているという幸福感に酔いしれる。

私は海とダイビングから数えきれない程の素晴らしい贈り物をもたらした。ただ一つ困ったことは水族館を楽しめなくなってしまうことである。水槽の中の色褪せた魚たちを見るのは辛い。自然の中の姿とはあまりにも違ってしまう。水族館で魚に興味を持った

なら、是非海の中にいる本物の彼らにも会いに行ってもらいたい。潜るのが無理ならせめて三点セットを着けて泳いでほしい。海の中の美しさと豊かさを知ったら、人にも動植物にも、そして地球にもやさしい人にならずにいられないことだろう。本当はこうして潜ることも彼らには迷惑なのだ。それでも海の魅力からはのがれられない。せめてなるべく邪魔にならないよう穏かなダイビングを心がけたいものだ。

子育てのため海とのかかわりもダイビングから海水浴になり、早や七年がたってしまった

た。海と共に過ごした日々はそのエッセンスだけがカラー写真のように一枚一枚の美しい絵として想い出される。子どもと遊ぶ海辺にも無数の発見があり、砂と戯れているだけで満たされた気持ちになる。それでも尚、目下の私の夢は小学生になった息子とバディを組んで座間味の海に潜ることだ。初めて海の世に身を浸した時、何を思うだろうか。待ち遠しくてワクワクしている。その日まで、あの美しい海はあのままの姿で同じやさしさで私たちを迎えてくれるだろうか。私たちは母なる海に愛され守られている。私たちも同じ愛の心で海を守って行きたいものである。